

10

10.18(月)
11:00~ 配信開始

生命医科学部
医情報学科

あきやま
秋山 いわき 教授

医療システムの 持続可能性と画像診断

メッセージ

新型コロナウイルス感染が社会に大きな影響を与えました。
持続可能な医療システムについて画像診断を通して考えます。

概要

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 患者の増大によって、大都市を中心に医療体制が逼迫しました。その症状はウイルスの下気道への感染とそれに伴う肺炎の重症化です。肺炎の診断には CT が有効ですが、COVID-19 患者を CT 検査室へ搬送することは容易ではありません。このような状況からベッドサイドで使える超音波診断装置が注目されていますが、超音波エコー画像による肺炎の診断はまだ始まったばかりです。

感染症の診療は次の4つの症状に分類されています。すなわち、軽症、中等症Ⅰ、中等症Ⅱ、重症です。中等症Ⅰで肺炎の所見があり、中等症Ⅱでは呼吸不全が見られ、酸素投与が必要となります。さらに肺炎が重症化すると ICU に入室するか人工呼吸器が必要となります。つまり、治療の分岐点において肺炎の診断が重要であることがわかります。COVID-19 の診療を通して、持続可能な医療システムにおける画像診断を考えます。